

仏陀の最初説法と慈悲

新 井 一 光

私は、仏陀の最初説法は慈悲に基づかないと考えている。以下、その理由を提示しよう。

1. 最初説法の動機

仏陀の所謂慈悲の出発点と見なされるものとして、この慈悲という概念が認められるのは、梵天勧請の伝説において最初説法を伝える一節においてである、と教えられている。仏陀の最初説法が慈悲に基づくとする我が国の学者の主張として、中村元博士のご見解を引用しよう。

釈尊が成道後に、梵天のすすめに応じて世の人々のために法を説かれたのは慈悲にもとづくのである¹⁾。〔下線＝新井〕

中村博士はここで明瞭に梵天勧請の後に慈悲に基づいて釈尊が法を説いたことを主張しておられる。また、高崎直道博士は、釈尊が悟りに至るまで、その心中に他者への思い、他者の利益を顧慮することが全く無いこと、また最初説法において説いた教えの中に慈悲や利他がないことを指摘するが、最初説法の動機に関しては、次のように、「有情に対する悲愍によって」であることを認めておられる。

経典はそこに梵天の要請があって、釈尊がようやく、己れの悟ったこと（法）を人に説く決意をしたといい、それを「有情に対する悲愍によって」(*sattākāruṇṇatayā*)とだけ記している。(高崎 1992, 163) 〔下線＝新井〕

中村博士、高崎博士とも、最初説法の起点を示す動機を「慈悲」、もしくは「悲愍」として見なしておられるが、両博士ともその典拠としているのはパーリ中部「聖求経」(*Ariyapariyesanasutta*)の次の一節である。

MN I 169, 5–7: *atha khvāhaṃ bhikkhave brahmuno ca ajjhesanaṃ viditvā sattesu ca kāruṇṇatam paṭicca buddhacakkhunā lokam volokesim*²⁾。

比丘たちよ、その時、私は、梵天の懇請を知って (ajjhesanaṃ veditvā), また (ca ... ca), 衆生に対して哀れみをもつものであることに縁って (sattesu ... kāruṇṇatāṃ paṭicca), 仏眼 (buddhacakkhu) によって世間を見た。

ここでは、仏陀が「仏眼によって世間を見た」動機として、「梵天を懇請を知って」と「哀れみをもつものであることに縁って」の二つが、並記されている。

なお、「慈悲」という語は、四無量、もしくは四梵住の前二支の「慈」と「悲」からなるもので、それぞれ「与楽」「拔苦」と定義され、禪定に関わる概念であるのに対して、kāruṇṇatā とは、特に仏のみに関して用いられる語であり（桜部 1972, 127）、区別されるべきである。従って、中村博士が「聖求経」の kāruṇṇatā を「慈悲」と解釈することは誤りである。また、高崎博士が「聖求経」の kāruṇṇatā を含む句を sattākāruṇṇatayā という複合語によって示すのはこのパーリテキストに典拠があるものではない。

2. 慈悲の動機の欠如

さて、このように「慈悲」は、「聖求経」を典拠として近代の学者によって最初説法の動機と教えられるが、しかし、『四分律』及び『五分律』による限り、梵天勧請の伝説において仏陀の最初説法の動機付けを示す場面では、仏陀自身に結び付けられて使用されていないのである³⁾。まず、『四分律』（仏陀耶舎、竺仏念訳、410-412年）の当該個所の記述を示そう。

爾時梵天、復白仏言、世間大敗壞、今如来獲此正法、云何默然不説、令世間不聞耶。唯願世尊、時演正法流布於世、世間亦有垢薄聰明衆生易度者。能減不善法成就善法。爾時梵天、説此語已、復説偈言、摩竭雜垢穢 而仏從中生 願開甘露門 為衆生説法。爾時世尊、受梵天勧請已、即以仏眼觀察世間衆生。（T22: 787a12-21）

この『四分律』の記述には、下線部のように「梵天の懇請」の動機だけが認められ、所謂「慈悲」の動機は、驚くべきことに、全く見出されないのである。即ち、『四分律』を伝承する法蔵部の仏教徒は仏陀の最初説法の動機を説くに際し、所謂慈悲の動機を認めなかった、もしくはこの語の使用を意識的に避けたと見る事ができるであろう。

また、同様のことは『五分律』（仏駄什、慧巖、竺道生訳、423-424年）においても認められると思われる。その当該個所の記述を示せば次の通りである。

白仏言、惟願世尊、哀愍衆生時為説法。自有衆生能受仏教。若不聞者便当退落。如是三返、復以此義説偈請仏、先此摩竭界 常説雜穢法 願開甘露門 為演純淨義。自我在梵宮

皆見古仏説 惟願今普眼 亦敷法堂教 衆生沒憂惱 不離生老死 然多樂善者 願説戰勝法。爾時世尊默然受之。即以仏眼普觀世間。（T22: 103c24–104a4）

この『五分律』の引用箇所冒頭には「哀愍」という記述が認められる。しかし、ここで何より重要なのは、この「哀愍」が「梵天の懇請」の中で他ならぬ梵天自身の言葉として出ている点である。つまり、ここでこの「哀愍」は仏陀に直接的な連関をもつものとしては説かれていないことは明らかである。この懇請の後、「默然して之を受けたまえり」と説かれてから、ただ「仏眼をもって普く世間を觀じた」と説明されているのであるが、その際、上掲「聖求經」（及び並行パーリ文献）には明示されていた二つの動機、即ち、「梵天の懇請を知って」及び「衆生に対する哀れみをもつものであることに縁って」は示されていない。つまり『五分律』でも仏陀が世間を觀じた動機は「梵天の懇請」だけであったと考えられる⁴⁾。

3. 梵天の懇請と慈悲

しかるに、以上の事実に基づいて、仏陀の最初説法は慈悲に基づかないと見なし得るであろうか。もしも、それが可能であれば、仏陀の慈悲の特性の起点を示すものとして、仏陀の最初説法の動機は、慈悲という語によっては、表現され得ないということになるのではないだろうか。これに対して、上に見たパーリ文献の並行箇所には *kāruṇṇatā* という語が使用されている。つまり、『四分律』及び『五分律』という二つの漢訳テキストにおける「慈悲」という語（あるいは *kāruṇṇatā* 相当漢訳）の欠如という事実は、仏陀の最初説法における慈悲の動機は、後代において、付加されたものとして成立したことを示しているのではないかと思われる。

さらに、仏陀の最初説法における慈悲の動機は、後代において、付加されたものとして成立したと見る理由は、パーリ文献並行箇所における *kāruṇṇatā* という語を含む記述、*brahmuno ca ajjhesanaṃ viditvā sattesu ca kāruṇṇataṃ paṭicca* は、*viditvā* と *paṭicca* という二つの *gerund* と接続詞 *ca ... ca* が併用される形で表現されているが、*brahmuno ca ajjhesanaṃ viditvā* と *sattesu ca kāruṇṇataṃ paṭicca* という二つの動機が、接続詞 *ca ... ca* によって同等な、つまり同じレベルにあるもの、あるいは同時的であると見なすことはできないのではないかと考えるからである。即ち、この二つの動機の中、「哀れみをもつものであることに縁って」という表現は、「梵天の懇請」の後でしか意味をなさないから、慈悲というような他

者への同情や憐憫が、「梵天の懇請」の認識と同等に扱われることは、最初説法の動機を理解する時、テキスト読解の面だけでなく、思想的理解の面でも誤りではないかと思われる。つまり、私は、娑婆世界の主である梵天 (Brahmā Sahampati) によって「世界が減する」ということが明晰な言語にされて発せられたことを釈尊が知ったということそれ自体に深い宗教性が認められる、と考えている。決して、哀れみや慈悲というような曖昧な情緒にそれが認められるのではない。つまり、ここでは「世界が減する」という世界の事実の認識が問題になっているのである。しかし、哀れみや慈悲といった情緒は、この「世界が減する」という事実の認識を破壊するような魔術性をもった何かにすぎない。このような情緒が、この冷徹な事実を記述している言語を超えて扱われて、仏陀が世間を見た動機となっているとは、私にはどうしても考えられないのである。

また、最初説法の動機を伝える記述において、「梵天の懇請」と「仏眼」という二つの要因は殆ど全てのテキストに見出されるが、すでに見た通り、「慈悲」の要因は、『四分律』のように全く欠如している場合や『五分律』のように仏陀に直接結び付けられていない場合が認められるのである。この「梵天の懇請」と「仏眼」という二つと「慈悲」の対比は鮮明である。つまり、私の考えでは、最初説法の動機を伝える記述において「慈悲」は仏教史において一貫してその重要性が認められているものではない⁵⁾。仏教を問い、仏陀の最初説法の真実の動機として「梵天の懇請」のみを伝え「慈悲」を認めない仏教者は当然いた。『四分律』と『五分律』の記述がそれを鮮明に示していることは、すでに見た通りである。しかし、もしパーリ文献の作者の意図を探るならば、私は、ここに *ca ... sattesu ca kārūññataṃ paṭicca* という句を付加した仏教者は、*brahmunō ... ajjhesanaṃ viditvā* によって表現される最初説法の動機に対して批判的であり、*brahmunō ... ajjhesanaṃ viditvā* が担う意義に対して否定的な見解を持っていたのではないかと考えるのである。

4. 仏教史における展開

仏陀の最初説法の動機としての慈悲は、後代においても問題とされていると思われる。その展開に言及しておきたい。根本有部は、仏眼によって世間を見た直接的な動機を「正に自ら」と説いて仏陀自身の内的なものとし、慈悲をその動機と見なしていない。

Saṅghabh 129, 28–130, 1: atha bhagavata etad abhavat: yac cāham svayam eva buddhacakṣuṣā lokam vyavalokayeyam iti.

『根本説一切有部毘奈耶破僧事』「爾時世尊，聞是請已，便作是念，我以仏眼觀彼衆生性差別不。」(T24: 126c17–18)⁶⁾

その時，世尊にこのような思いが生じた。「私は，正に自ら (svayam eva) 仏眼によって世間を見るであろう。」

この Saṅghabh の記述は，梵天の懇請を *kāruṇātā* と同等の動機と見なすあり方に対する批判となっていると考えられる。しかし，「正に自ら」という動機が他の並行文献に出ているわけではないから，「正に自ら」という最初説法の動機は根本有部独自の考え方と思われる。次に，『法華経』の記述を検討しよう。

KN 38, 8–11: atha khalu bhagavāms traitīyakam apy āyusmataḥ śāriputrasy ādhyesaṇām viditvāyusmantam śāriputram etad avocāt.

その時，世尊は，三たび，尊者シャーリプトラの懇請を知って，尊者シャーリプトラにこのように語った。

この『法華経』梵本には，上掲「聖求経」の *ajjhesanaṃ viditvā* に相当する *ādhyesaṇām viditvā* とその相当漢訳，即ち，『正法華経』「于時世尊見舍利弗三反勸助。而告之曰。」(T9: 69b16–18)，『妙法蓮華経』「爾時世尊告舍利弗，汝已慙慙三請。豈得不説。」(T9: 7a5–6) はあるが，問題の *sattesu ... kāruṇātam paṭicca* に対応する記述は見出せないのである。『法華経』を著した仏教者も，梵天勸請の伝説における仏陀の最初説法の起点をなす動機として慈悲の特性に問題を認識し重視しなかったと考えられる。

最後に，『根本中頌』27.30において，「憐愍を取り入れて (*anukampām upādāya*)，正法を説いた」と述べられるのは，ナーガールジュナは，仏陀の最初説法の起点をなす動機として「梵天の懇請」を重視せず，もしくは承認せず，このような慈悲の特性を取り入れて仏陀に与えたことを示すと思われる⁷⁾。

5. 結論

『四分律』及び『五分律』において，最初説法の動機を表す *kāruṇātā* に相当する漢訳語句が欠如していること，及び釈尊自身の成道に至るまでの事跡と思想の評価に基づいて，現行パーリ文献における *ca sattesu ca kāruṇātam paṭicca* の記述は後代に付加されたと考えられる。これは，慈悲の動機は釈尊自身に直接遡り得ないことを示す。それ故，仏陀の最初説法は慈悲に基づかない。

- 1) 中村 2010, 45 参照。なお、梵天勧請の伝説の典拠に関して、阪本 1992, 67 参照。
- 2) ≈ SN I 138, 1–3; DN II 38, 18–20; Vin I 6, 23–25.
- 3) 『四分律』において *kāruṇātā* に相当する漢訳語句によって表される動機が見出されないことは、Schmithausen 2000, 120 (= 齋藤訳 2002, 73) において指摘されている。
- 4) 上掲「聖求経」及び並行パーリ文献（前註 3）の引用個所に対応する四つの漢訳に関して、『長阿含経』には「甚可哀愍」「吾愍汝等」の記述はあるが、しかし重要なのは、前者は梵天の言葉であり、後者は「開演甘露法門」の導入部を示しており、仏眼によって世間を見た動機ではない点で、パーリテキストと厳密には異なっていることである (T1: 8c9–20)。「増一阿含経」は、「知梵天心中所念」と「慈愍一切衆生」を一応並記するが、後に述べるように「仏眼」という重要な語が出ていないことが気に掛かる (T2: 593b15–16)。また、『過去現在因果経』には「梵王等請」と「仏眼」が出ているが、ここに、*kāruṇātā* 相当漢訳は見出せない (T3: 643a13–22)。「仏本行集経」には「梵天王勧請」「起慈悲心」「仏眼」という三つの要因が揃うが、漢訳年代が六世紀後半という他の三文獻より遅い時期である点が気に掛かる (T3: 806c11–12)。
- 5) 前註 2 及び前註 4 参照。
- 6) 並行記述に関して、阪本 1992, 67 参照。Cf. CPS 116: *atha bhagavata etad abhavat yannv aham svayam eva buddhacakṣuṣā lokam vyavalokayeyam*。『仏説衆摩訶帝経』「爾時世尊，受於梵王懇勤勸請已，默而許之。遂以仏眼，審諦觀察世間衆生。」(T3: 953a14–15)。
- 7) 『般若経』や中観派の慈悲の展開に関して、新井 2017 を参照されたい。

〈略号〉

パーリ文献の略号は、*A Critical Pāli Dictionary* の Epilegomena に従う。パーリ文献は Pali Text Society ed. を底本とする。

CPS *Das Catuspariṣatsūtra: Eine Kanonische Lehrschrift über die Begründung der Buddhistischen Gemeinde*, Teil II: Textbearbeitung: Vorgang 1–21. Ed. Ernst Waldschmidt. Berlin: Akademie, 1957.

KN *Saddharmapunḍarikasūtra*. Eds. Hendrik Kern, Bunyiu Nanjio. Bibliotheca Buddhica 10, St. Pétersburg, 1908–1912.

Saṅghabh *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu: Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, Part I. Ed. Raniero Gnoli. Roma: Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1977.

〈参考文献〉

中村元 2010 『慈悲』講談社。

桜部建 1972 「*karuṇā*, *mahākaruṇā*, 大悲」『佐藤博士古稀記念仏教思想論集』山喜房仏書林, 123–129.

高崎直道 1992 「慈悲の淵源」『成田山仏教研究所紀要 特別号仏教文化史論集 I』15: 161–188. 阪本（後藤）純子 1992 「『梵天勧請』の原型」『印度学仏教学研究』41(1): 469–474.

Schmithausen, Lambert. 2000. “Gleichmut und Mitgefühl: Zu Spiritualität und Heilsziel des älteren Buddhismus.” In *Der Buddhismus als Anfrage an christliche Theologie und Philosophie*, ed. Andreas Bsteh, Studien zur Religions-theologie, Bd. 5, 119–136. Mödling: Verlag Se. Gabriel.

齋藤直樹訳 2002 「超然と同情 初期仏教にみられる精神性と救済（利）の目的」『哲学』三田哲学会 108: 67–99.

新井一光 2017 「『根本中頌』27.30 「最終偈」の解釈」『インド論理学研究』10: 167–203.

〈キーワード〉 最初説法, 慈悲, 梵天勧請, 『四分律』, 『五分律』

(曹洞宗総合研究センター研究員, 博士 (仏教学))